

# ベルクソンとZEN

## —その直観について—

Bergson and Zen  
—On their Intuition—

岩 本 一<sup>\*</sup>  
IWAMOTO Hajime

### 要旨

この論文はベルクソンと禅の直観についての研究である。

直観の世界はベルクソンも禅も論理をはなれるので比喻によらなければ適当な表現の方法がない。しかしそれが直観なのである。そこでまず、ベルクソンの直観とは何かを彼の著作、「時間と自由」(1889)、「物質と記憶」(1896)、「笑い」(1900)、「創造的進化」(1907)、「精神エネルギー」(1919)、「道徳と宗教の二源泉」(1932)、そして「形而上学入門」(1934)を参考として探求する。

次に、禅の直観を探るために「無の思想」をあつかっている「無門関」四八則のうち第一則の「趙州狗子仏性」という古則を使った。なぜなら、「無の世界、即 直観の世界」だからである。

さらに、我々はベルクソンの直観と禅の直観を比較してそれらの類似性を浮き彫りにした。最後に、ベルクソンの直観概念の批判にたいしてその概念の再編成を試みる。しかし、第四節は直観的認識を要請する「有用性の観点」から論じたにすぎない。もう一つの「共感」としての直観を論じていない。そこで、この点の考察は次の機会に譲ることにした。

キーワード：直観、ベルクソン、共感、無の思想、有用性の観点

---

<sup>\*</sup>東洋大学ライフデザイン学部 Toyo University, Faculty of Human Life Design

住所：〒351-8510 朝霞市岡48-1 (東洋大学)

電話・ファックス：048-468-6371 (研究室直通)

## 序

著者は今まで「禅と西洋哲学」について論述してきた。即ちユング、ウィトゲンシュタイン、そしてハイデッガー達の哲学と禅の関係について述べてきた。その最後としてベルクソンを取り上げて「禅と西洋哲学」の稿を完了したい。

ユングは集合的無意識の存在は、普通、抑圧されてできた個人の無意識の奥にあると考えた。つまり人間は過去の体験やその他様々のものがくっついて複雑な内容を作り出している。それが「コンプレックス」である。その中心が何時も集合的無意識あるいは「元型」と呼ばれるものである。言い換えると、集合的無意識は、実はこの「元型」と呼ばれる本能的な枠組みの総称である。禅では、あらゆる意識の根源的なものとして、潜在的に存在するアラヤ識というものを想像している。これはユングの集合的無意識と類似性がある。ウィトゲンシュタインとハイデッガーは、構造主義では言語の背後にある言語を支えている何者かを掴みきれなかった「意味生成」の問題に関わりあった。ウィトゲンシュタインは、意味論「探求」のなかに「意味生成」のカギをとく可能性が見出されると考えた。一方ハイデッガーは、ひたすら自己や存在について究明し、実存の底にある何ものかを探求し、この領域にこそ、「意味生成」の場があると考えた。彼らはこの命題解明には禅と意識的にまた無意識的に関わりあってきた。

では「禅と西洋哲学」の最終稿として禅とベルクソンーその直観についてーを述べる。第一節にベルクソンの直観とは何か、第二節に禅の直観とは何か、第三節でベルクソンの直観と禅の直観の類似性について論考する。第四節でベルクソンの直観に対しての概念の再編成について述べる。

### 1. ベルクソンの直観とは何か<sup>1)</sup>

直観には様々な位相があるので、直観という言葉の用語法に応じて定義すると、まず、直観を分析と対にして述べる時には認識作用を意味する。次に、直観が「イメージ」や「概念」と共に語られる時、「持続の直観」という形で直観されたもの（結果）を示す。最後に、直観が「知性」や「本能」と比較される時、直観するもの（能力）を意味する。

#### 1.1 認識作用としての直観と分析

ベルクソンは「形而上学入門」のなかで、事物を認識する根本的に異なる二つの仕方を次のように区別する。絶対は直観の中にしか与えられないが、他のすべては分析の領分に属する。分析は対象に対して採る視点及び対象を翻訳する記号の二点に於いて相対的な外側からの認識をうるおす作用であるのに対して、直観は、主客合一のもとで内側から絶対的な認識を可能にする作用である（PM, 177-8）。言い換えると、分析が対象の周りを廻りながら諸要素に分解還元した上で〈多〉から〈一〉を再校正しようとむなしく望むものであるのに対して（真の総合とも言うべき）直観は、対象の中に直に入り、知るものと知られるものとの区別が無い状態で一挙に〈一〉を把握しうる「単純な行為」

(PM, 181) である。

共感は直観の本質的性格である認識の内部性を示すものである。この内側からの認識ということを経験的にイメージによって曲解してはならない。この点で「問題となっている内部性は、霊的若しくは精神的内部性であって、物質的内部性ではない。」(J. Chevalier, 1926, p.86)

## 1.2 認識内容としての直観・イメージ・概念

ベルクソンは「形而上学入門」のなかで、「われわれの持続は、直接には直観の中に示され、間接的には諸々のイメージによって暗示されるが、概念という語を本来の意味に用いるならば、概念的表象の中に閉じ込めることはできない」(PM, 188-9) と述べているが、しかし直観からイメージへ、さらに概念へ降りて行くことが可能とされる。これをベルクソンは円錐の例 (PM, 198) で述べている。つまり、円錐を実際に見れば、それは頂点で数学的点となり、底面に行くに従って大きな円となることが直ぐにわかる。しかし、点と円という対立概念からは円錐を直観しえない。持続という心理的生命の多様性と単一性についても同様であると考えられている。つまり、「空間と物質へ向う思惟の作業の常習的方向を転換して精神の鼓動を感覚すること」が求められている。要するに形而上学は概念から実在ではなく実在から概念へ行く為の努力である (PM, 206)。

では、対象の内から外へという方位、或いは直観から概念へという方位は如何にして可能であるのか。ベルクソンは二つの方法を考える。「一方は概念による静態的なもので、そこでは認識するものと認識されるものの間に実際に分離があります。他方は、直接的直観による力動的なもので、そこでは認識する行為が実在を産出する行為と一致します。」(Mél, 773) ベルクソンは、観想の受動性と創造の能動性とが入りまぜになった直観の力動的構造をスピノザの直観に見出したと考えられる。つまり、還帰は発出と同じ事であり、観想は即ち創造であるという力動性ゆえに〈一〉としての直観はイメージや概念の〈多〉へと展開される、と言える。

## 1.3 認識能力としての直観と本能・知性

「創造的進化」では、「生命に内在する二つの力」(EC, 134) である本能と知性とが、本性上の差異を示しながらも共通の起源から分岐したものゆえ相互補足的である、という見地から、両者を越えた直観による生命への肉薄が試みられる。

「本能は共感である。もしこの共感がその対象を広げ、更にまた自分自身を反省することが出来るとすれば、それはわれわれに生命の働きを解く力ギを与えてくれるであろう。」(EC, 177) 「形而上学入門」で直観を定義するために用いられた共感という言葉は、「創造的進化」では本能を説明するために、「具体的な説明、もはや科学的ではなく形而上学的な説明」(EC, 177) として積極的に語りだされている。

直観は、本能および知性と如何なる関係にあるのか。「(…) を直観と私が言うのは、利害関心を

離れ、自己自身を意識し、その対象を反省して、これを無限に拡大できるようになった本能の事である。」(EC, 178) しかし、「本能が拡大され純化されて直観になるためには、知性の助けが必要とされる。「知性が無かったならば、直観は本能という形の下で、実際に自分の利害に関わる特別な対象に釘付けにされたまま、その対象によって外面化され移動運動を続けていたことであろう。」(EC, 174) 直観は、本能からは共感という発見的性格を、また知性からは自己自身と対象とを反省しかつ対象とを無限に拡大しうる意識ないし認識という探求的性格を両方から分かち持った場合に想定される高度の認識能力であると言える。

## 2. 禅の直観について<sup>2)</sup>

禅は科学、または科学的の名によって行われる一切の事物を包摂し、その限界を認識し、超越している。禅は体験的であり、科学は非体験的である。非体験的なものは抽象的(体験捨象による抽象的)であり、個人的経験に対してはあまり関心を持たぬ。体験的なものは全く個人に属し、その人の経験を背景としなくては意義をもたぬ。科学は系統化を意味し、禅はまさに全体把握・具体行動である。言葉は科学や哲学に要るが、禅の場合には妨げとなる。なぜならば、言葉は分割・抽象するものであって、現実様態：実際そのものではない。実態こそ、禅において最も高く評価されるものである。

知識には三種ある。

第一は、読んだり聞いたりすることによって得るものである。いわゆる知識の大部分はこの種のものである。私達は世界の知識については、他人が備えてくれた地図に依存しているのである。

第二の種類の知識は、科学的と普通言われているものである。観察と実験・分析と推理の結果分科の学である。それは前者より強固な基礎を持っているのがある程度、体験的で経験的なところがあるからであろう。

第三の種類の知識は、我々が述べようとしている直観的な理解の方法である。科学的知識を重んずる人にとって、直観的な知識は現実に確実な基礎が無いのであまり絶対的な信頼を置くことが出来ない、と言う。しかし、真実としては、いわゆる科学的知識は完璧なものではなくて、それ自身限界性があるから、異変、とくに個人的異変の起こった場合には、科学と論理はかねて蓄えておいた知識と計算を利用する暇が無い。記憶している常識だけでは役に立たぬ。このような場合、精神はあまり咄嗟なので過去に貯蔵した記憶の一切『意識・無意識・人類・生類・歴史・宇宙』を喚起することはできないからである。それに対して、直観的知識はあらゆる種類の信仰・行動、とくに宗教的(全体健全)信仰・行動の基礎を形成しており、最も能率的に危機を対応処理することができる。

禅こそがこの第三の形態の知識である。それは深く存在の基礎(全体根源)にまで浸透している。したがって直観は我々の存在の深いところから出てくるものである。

その存在(様態・特徴)を纏めると次のようになるであろう。

一、禅は精神に焦点を置く結果、形式(常識・世俗)を無視する。禅は如何なる種類の形式の中にも

精神の存在をさぐりあてる。形式の不十分、不完全が判ると、精神がいつそう表面に出てくる。形式の完全は人の注意を形式に向けるが、内部の真実そのものに向けがたくなる。

二、禪は形式主義、慣例主義、儀礼主義を否定する結果、精神が表出し、その孤絶性、孤独性、純粹性・根源性に還る。この孤絶とは 清貧主義・帰源・禁欲主義の無執着の精神である。それは全ての必要ならざるものの痕跡をいささかも止めないものである。

### 3. ベルクソンの直観と禪の直観の類似性<sup>3)</sup>

禪の世界は「無」である。この「無」の世界は全く直観の世界である。この直観ということを強調したのがベルクソンである。ベルクソン哲学で最も特異とされる「直観」は、実は禪の認識において既に二千年来その基調にあるものである。したがって、ベルクソン哲学が東洋的であると言われたものである。ベルクソンは巧妙な比喩を多用する。これは直観の世界が禪の世界と同じく抽象的論理を離れ、比喩を使うしか表現方法がないからである。それは禪の場合も同様である。それが直観だからである。

ベルクソンは、その主著「創造的進化」のなかで、生命の実体は知識によって到底把握できないことを次のように述べている。

「生命進化の歴史は、未だ完了されていない。その進化の歴史を見れば、理知は各種の脊椎動物を経て人類に達するまで、不断の発展を続けて、漸次に形成されてきた事を示す。だから人間の理知は、無生物の間に於いては、極めて安易にこれを処理することが出来る。然るに人間の理性は、それが純理論的であるかぎり、生命の実相とか、進化の全意義を明らかにしうるものではない。なぜならば、生命の進化は絶えざる創造であって、その生命の母体によって生まれてきた人間の思想、すなわち理知や悟性は、生命そのものを、どうして包含することが出来ようか。生命から見れば、思想は単に生命の一顕現の一方面に過ぎない。それがどうして生命進化の全体に適用されることが出来ようか。

波浪に打ちあげられた海岸のさざれ石が、波浪そのものの姿を示す、そんなことが出来る筈はない。」（創造的進化－金子馬治訳）

さらに、ベルクソンはしばしば用いる映画のフィルムの例によって述べている。そこには直観によらなければ到底真の把握は出来ない世界が存在することを語っている。

「茲に運動というものを、最も巧妙に説明する為に、映画フィルムを作って見る。いかに精巧にそれを作ったとしても、それによって、運動そのものを真実に捉え得るものでない。フィルムに映った映像は、その運動の持続の中の一コマ一コマを、瞬間的に停止の状態に於いて捉えたものであって、それを映写機にかけ、連続した視覚の錯覚に導き、それにより、単に運動の映像を捉えたというに過ぎぬ。運動そのものの実態は、それでは到底わからない。運動そのものは直観以外に捉える方法はない。

生命もまた、持続の中に直観されるだけで、文字も、言葉も、畢竟ずるに概念化され、固定化され

たもので、映画フィルムの役をなすだけで、直観の世界では何の役にも立つものでない。」(創造的進化—金子馬治訳)

ベルクソンの説くこんな諸点は、全く禅僧の説く禅の直観と相似ている。

それからベルクソンが直観について述べる時、当然行き当たる問題は「存在と無」である。この問題を「創造的進化」のなかで(存在と無)として捉えている。

『哲学者の多くは、「無」という観念を殆ど不注意に看過する。しかも「無」なる観念はしばしば哲学的思惟の隠れた動機であり、眼にみえざる原動力になるものである。

存在ということは無の征服のように思われる。私は自らに向って問う。「ここに何ものも在りえない」とそう云った途端に、私は、何ものかが存在することに驚く。或いはまた、あらゆる存在を恰も敷物の上に置くが如く無の上に拈がれるものと考え。即ち無がまず存在し、有はその上に生じたものだと思う。さらにまた、つねに何かが存在したとすれば、無はつねにその基体、或いはその役目をしなければならなかっただろう。従って無は永遠に存在するものに先行するものでなければならなかった。

実在はただ無を通り抜けて初めて存在に到達するものである。私は眼を閉じ、外界からくる感覚を一つ一つ消そうとする。すっかり消してしまえば、私のあらゆる知覚は消え去り、物質の世界は、私にとっては沈黙と闇のうちに沈んでしまう。しかも私は尚生存しており、また生存せざるをえない。私は依然としてそこにいる。そうして私の肉体の表面と内部からくる有機感覚をもっており、私の過去の知覚が残した回想をもっている。

私は外部であろうと内部であろうと、たえず何かを知覚している。私が外的対象を、何ものも認識しなくなったときは、即ち、私は、私が自己についての意識の中に遁れ去った時である。この内的自我を放棄するとしても、その放棄そのものが、創造的自我の対象となり、今度はこの創造的自我が消えてゆく自我を、外的対象として知覚する。されば外的であろうと内的であろうと、私の想像に現れる対象がつねに存在する。かくて私の想像力は次から次へと移ることができる。また順々に、外部知覚の無とか内部知覚の無とかを創造することが出来る。けれどもこの二つを同時に思い浮かべることは出来ない。

われわれの精神が、かく内部と外部とを往来するとき、そこには双方から同じ距離にある一点がある。そこでは一方がもはや認められず、しかも他方がまだ認められないような一点である。この点に於いてこそ虚無(空)の心像が形成されるのである。つまり実際には双方の境界となっているような点に到達して、この双方を認めるのである。

そしてかく定義した無の心像は、事實は、事物の充実した心像である。即ち主観の心像と客観の心像とを同時に含み、さらに一方から他方へ絶えず飛躍しようとしているが、いずれか一方に決定的に止まろうとすることを拒むような心像である。』(ベルクソン「存在と無」—小面幸作訳)

禅の宗教としての基盤は、仏典の般若心経(摩訶般若波羅蜜心経)である。漢文に翻訳されたものでは、本書の一頁に足らぬ程度の長さであるが、それは徹底した「存在と無」の表現である。禅思想はその思想の奥から滾々と流れ出す、永遠に絶えない泉である。」

禅は「存在と無」の問題を次の様な「狗子仏性」の公案で述べている。

『趙州和尚、ちなみに、僧問う、狗子に還って仏性ありや、はた無しや。州曰く無』これが公案である。州曰くの「州」は「趙州」のことで、還っては却（さて）の意。今、この「趙州無字」の公案を、鎌倉円覚寺の管長朝比奈宗源師の提唱を一例として承述して見る。

ある時趙州に向って、一人の旅僧が「狗子に還って仏性ありやはた無しや」という問題を出してきて問答を迫った。趙州はにべもなく「無」と答えた。一切衆生には悉く仏性が「有る」というのが、仏教の基本信条である。この僧はわざわざ分かりきったこのことを担ぎ出して、薄汚い狗子（犬ころ）にも人間のような尊い仏性がありますか、仏と同じ性があるのですかと持ちかけて来たのである。

趙州の出方によっては、一発位はあてたかも知れない勢である。この僧の質問には含みがある。つまり無いといえ、それは仏道の教義にもとることになる。仏性有りと言え、この犬の醜さはどうだ、それでも仏性ありと云えるのかとたたみかかり、二股をかけて趙州を追求しようという策謀も含んだ問題の提起である。しかし趙州はそんなことに引っかかりはせぬ。けろりとして只「無」と切って返した。ただ無であるが、この無が曲者である。有無の無でもなく虚無の無でもない。勿論、ベルクソンの観念としての無でもないのである。強いて云えば禅独特の「絶対の無」である。」

次にベルクソンの著作全体を通して言語に対する不信が執拗に繰り返し表明されていること、彼が直観について語ったことが一見すると誤解を生む解釈に導くように思われる。しかし、ベルクソンの直観は言語的認識一般を拒否するものではない、ということを次の章で証明を試みる。

## 4. ベルクソンの直観に対しての概念の再編成<sup>4)</sup>

### 4.1 内からと直接的認識

1. 「ベルクソンやプロティノスのような神秘的直観の哲学者たちがいて、彼らは、言語は根源的真理を定式化するには適さないと考える。」<sup>5)</sup>
2. 「ベルクソンは、一種の哲学的なはぐらかしによって、概念から、二律背反から、思弁的な思想体系から逃れることが出来ると考えた。」<sup>6)</sup>
3. D.エメットは、「ベルクソンの治療は、自然言語に変えて直接的な非言語的直感をもってくることであった。」<sup>7)</sup>

このような理由からベルクソンの直観とは言語から脱却して対象と直接共感する営みである、という捉え方がされている。

しかしベルクソンの直観は言語的認識一般を拒否するものではない。ベルクソンの直観が拒否するのは、特定の概念、特定の記号、特定の言語に限られるのである。なぜならベルクソンは、言語、概念、記号、知覚などは全て功利的起源を持つと考えたからである。つまり、彼の概念、記号、言語に対する批判は、すべてそれらが担う有用性に向けられている。

まず1、2、3の引用はすべてベルクソンの直観は言語や概念を拒否する営みである、と解している。これは、ベルクソンが「形而上学入門」の中で「直観とは、概念や記号に頼らないで、対象を①内からそれ自体において、②直接に把握する認識の様態である。」と述べており、そこで引用（1、2、3）のような誤解を招く用語が、この定式にはすべて含まれている。

では、この誤解を退けるには①と②を検証することが必要であろう。

#### ① 内から

「形而上学入門」では分析とは対象を「外から」捉える認識であるのに対して、直観とは対象を「内から」把握する認識であると述べられている（PM, 177-8）。「外からの認識」とは我々の実利に奉仕する認識である。つまり、「一定の利害を吹き込まれた認識の様式」（PM, 206）である。しかし、ベルクソンは、我々は自らの内面をも日常的には外からしか、つまり実利的観点からしか認識しないと考える。「われわれは事物とわれわれとの中間地帯にあって、事物の外側に、またわれわれ自身の外側に生きている。」（R, 181）したがって、内からの認識は、内観による認識を必ずしも意味しない。「内から」、「外から」という対比は、認識の対象ではなく認識の様態に基づく対比である。内からの認識とは、有用性に基づく観点を、すなわちわれわれの実利的利害に基づく観点を排除した認識である。

#### ② 直接（的）に

われわれの日常的経験は「直接的」経験ではない。われわれの外的経験の源泉である知覚がすでに有用性によって歪曲されているからである。知覚は事物を功利的な観点から分類しており、われわれの日常的な語彙はこの分類を表現している。直感的認識へいたるには「経験の曲がり角とでも呼べるものに身をおき、直接的なものから有用なものへの移りゆきを照らし出した。」（MM, 206）直感的認識は、功利的分類の排除を目指す。それは、日常的語彙が表現する、功利的視点に基づいた事物の分類を再編成しようとするのである。直接的認識が退けるのはただ功利的分類を表現する実利的語彙に限られる。したがって直観は、およそ言語を媒介せずに事物と合致しようとする認識の様態ではない。<sup>7)</sup>

### 4.2 ベルクソンの直観が拒否するのは有用性に汚染された①特定の概念、②特定の記号、③特定の言語に限られる。

#### ① 特定の概念

直感的認識は概念によらない。しかし、この場合もベルクソンが拒否したのは概念一般ではなく、つねに「社会的概念」、「社会生活に有用な概念」（PM, 91）であった。社会的概念とは、「日常的観念、すなわち社会的志向の保管者である言葉」（PM, 90）である。このような概念は社会にとって便利であるように、また人間の共同作業を円滑にするように現実を区分する。しかし、社会的区分はしばしば共同生活にとって無用な区別を無視し、無用な類似を強調する（R, 16）。こうした区分、分類を認識の場合にそのままもちこむとき哲学的擬似問題が生じる。したがって、厳密に言えば、ベルクソンが批判するのは社会的概念や記号そのものではなく、それを認識の場合に無批判にもちこんでしまうことである。

#### ② 特定の記号

「形而上学入門」以外の著作で「記号」が登場する文脈を追ってみると、ベルクソンは「記号」という語をきわめて限定された特殊な意味で用いていることが判る。彼の言う「記号」を記号一般と取



り違えるとき、直感的認識の本性も誤解されるだろう。ペルクソンの記号概念は、以下の四つの特性をもっている。

a) 行為の表象

記号とは第一に、事物に対する我々の行為の表象である。言い換えると、記号はわれわれが事物をどう扱うか、事物からわれわれがどんな利益を引き出すことができるかを告げる表現である。ペルクソンは記述的な表現のうちにも行為への促しを読み取る。言語は、将来の行為に役立つように事物の特徴を記述するのである。(PM, 86)

b) 固定性

事物に対して有効に働きかけるためには事物を固定した相のもとに捉える必要がある。ここから進行を本質とするものも、固定的に把握し表現しようとする傾向が生まれる。進行を本性とするものを固定的に表現する概念をペルクソンは記号と呼ぶ。したがって、持続を空間的に表象する概念はこの意味で記号である。つまり、「記号の一般的条件」とは「実在の固定した相を静止した形式のもとに書き留めること」である。(EC, 328)<sup>8)</sup>

c) 共通のもの

「記号や観点は、この人物から、他の人物と共通しているところしか私に引き渡してくれない。」(PM, 179) なぜならば、共通の効用をもつものは、同じ言葉のもとに分類され、共通の効用に基づく分類を表す言語表現、つまり記号であるからである。しかしこの分類は、事物に即した分類ではなく、事物とわれわれの行為との関係に基づく分類であるから「実在の文節」(PM, 23) を歪めてしまう。

d) 努力の省略

「記号は記号化される対象に取って代わり、そしてわれわれからいかなる努力も要求しない。」(PM, 186) この場合の「記号」は既成の概念と同義である。これと対照的に直観は、既成の概念による分類を新たに編成し直す営みであるから、まさに努力を要求する。

以上の様に、ペルクソンは「記号」という語に限定された特殊な意味を負わせている。そこでわれわれは「形而上学は記号なしですまそうとする学である」(PM, 182) ということは記号一般を排除する宣言とみなすことはできない。記号とはわれわれの実用的利害の為に作られ、対象を固定した共通の相のもとに捉え、認識の為に努力をわれわれに要求しない表象の別名なのである。直観が拒否するのはこのような記号に限られる。

### 4.3 特定の言語（日常語）

ペルクソンが拒否するのは実用のために作られた記号や概念あるいは日常語である。ペルクソンは、言語が必ずしも有用性に奉仕しているのではない、と考えた。さらに彼は、「直観のこの非常な僅かな部分が拡張されて、詩をついで散文を生み出し、最初は記号でしかなかった言葉を芸術の道具に転換したことを認めよう。」(PM, 87)<sup>9)</sup> 言語は実在の動きを凝固させ固定するばかりではない。言語もまた生きていく。「われわれは言語のうちに何かしら我々の生を生きるものを感じる。」(R, 99) と言う。このように、ペルクソンは言語の中にも、たとえ不完全であるにしても生きたものがあると考えていた。したがって、直観を言語によって表現することは不可能ではない。言語や概念から離れ

なくとも、実用的認識から逃れることはできるのである。結局、ベルクソンの直観とは、哲学に密輸入された実用的認識を退け、実在の文節に合った概念を見出す営みであると言える。

## 結論

われわれは第一節でベルクソンの直観とは何か、そして第二節で禅の直観について考察した。更に第三節で禅の直観とベルクソンの直観を比較して類似性を探った。第四節で、ベルクソンの著作を通して彼の直観が言語的認識一般を拒否しているように判断されている。しかし彼は言語による認識（実用的思考法）の欠陥を概念あるいは言語表現の治療によって矯正し、実在の認識を可能にすることがベルクソンの直観の課題であったことを証明した。

さらに、ベルクソンは哲学に無自覚に取り込まれた社会的実用的思考様式を拒否している。その特徴を挙げて見よう。

a. 二つの存在者が同じ本性をもつにもかかわらず本性を異にするかのように扱う場合（無意識）

b. 本性的に異なる概念を同じ名で呼ぶ場合（人類愛）

aの無意識の場合には認識論上の同等性を回復し、bの人類愛の場合には本性的差異を見出すことが実用的思考の治療になる。<sup>10)</sup> この場合直観的認識は、概念ないし分類の編成変えを行うと言えるだろう。

次に禅について述べると、禅の世界は「無」である。この「無」の世界は、全く直観の世界である。そこで再び「無」の世界を探るため趙州の無字に対する無門慧開の拈提で「無」について見てみよう。<sup>11)</sup>

「無門曰く、参禅は須らく祖師の関を透るべし。妙悟は心路を窮めて絶せんことを要す。祖関透らず、心路、絶せずんば、尽く是依草附木の精霊（日本で云う幽霊）ならん。且らく云え、如何なるか是祖師の関。只この一箇の無字、すなわち宗門の一関なり。遂に名付けて禅宗、無門関と曰う。透得過する者は、親しく趙州に見ゆるのみに非ず、便ち曆代の祖師と、手を把って共に行き、眉毛相結んで同一眼に見、同一耳に聞くべし。豈慶快ならざらんや。透関を要する底あることなしや。三百六十の骨筋、八万四千の毛穴を以って、通身にこの疑団を起し、この無字に参ぜよ。昼夜提撕して虚無の会を作すこと莫れ。有無の会をなすこと莫れ。この熱鉄丸を吞了する如くに相似て、吐けども又吐き出さず、従前の悪知、悪党を蕩尽し、久々にして純熟して、自然に打成一片ならば、唾子の夢を得るが如く、只自知することを許す。驀然として打発せば、天を驚かし地を動ぜん。関將軍（蜀の関羽のこと中国第一の勇将）の大刀を奪い得て、手に入るが如く、仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し、生死の岸頭に於て、大自在を得、六道四生の中に向って遊戯三昧ならん。且つ作麼生か提撕せん。平生の氣力を尽してこの無字を拈せよ。若し間断せずんば、好し法燭一点すれば便ち著くに似ん。」

最後に、日本は昨年、未曾有の被害が東北地方を襲った。それは津波とそれによる原子力発電所の

破壊であった。特に原発の破壊はいろいろの問題を起こした。たとえば、移転の問題である。広大な土地を所有するロシアやアメリカの原発事故と比べて東北三県はあまりにも狭いので住民の移動がうまくいかず、また日本人特有の土地に対する愛着が移動を妨げうまくいかなかった。さらに、最大の問題は、放射能の脅威と被害であった。福島に対応を世界中が注目しているが政府は事故を隠しなくなり真実が見えてこず相変わらず次つぎと問題が発生し、いつも打つ手が間に合わない。今まで、日本人が幸福の哲学・人生の生き方として追求してきた西洋哲学は、過去に経験のないこの問題に対して、生きづまを感じ、混迷の色を深めているだけである。今こそわれわれは禅思想である直観(直接根源洞察・無我無欲実践)を採用し、復興の道を探り、できるだけ早く実行・実現する必要がある。

ベルクソンの著作からの引用略号は以下のとおり。

DI : 時間と自由、1889  
 MM : 物質と記憶、1896  
 R : 笑い、1900  
 EC : 創造的進化、1907  
 ES : 精神エネルギー、1919  
 MR : 道徳と宗教の二源泉、1930  
 PM : 形而上学入門、1934  
 M<sub>el</sub> : 論集、1972

## 注

1. 滝 一郎、ベルクソンにおける「直観」の概念—ベルクソン美学研究 pp. 15-18
2. 鈴木大拙、北川桃雄訳、‘禅と日本文化’ 講談社 2005年、pp. 19-23
3. 岡部平太、‘スポーツと禅の話’、pp. 294-301
4. 中村雅之、‘ベルクソンの直観と概念の再編成’ pp. 203-209
5. W.P. オルストン、‘ことばの哲学’ 村上陽一訳 培風館 1968年 p.8
6. Verdenal, Rene, ‘La Philosophie de Bergson’, Histoire de la Philosophie vI, Hachette, 1973, p.252
7. Emmet, Dorothy, ‘Language and metaphysics’: ‘introduction to a symposium’. Theoria to Theory, 1977, vol.11, p.50
8. Pariente, J-C., ‘Le langage et L’ individuelle, Librairie Armand Colin, 1973, pp. 17-18
9. PM, 86-92
10. Deleuze, G., Le Bergsonisme, P. U. F., 1968, p. 11
11. 岡部平太、pp. 301-302

## 参考文献

- 1 佐藤透、‘ベルクソンの時間論と生きた永遠、’ 科学基礎論研究、Vol. 19, No. 1, 1988, 創文社
- 2 宮山昌治、‘大正期におけるベルクソン哲学の受容、’ 学習院大学文学科学研究所共同研究プロジェクト「明治期以降におけるフランス哲学の受容に関する研究、平成16～18年度
- 3 同上、‘昭和期におけるベルクソン哲学の受容’

- 4 和泉浩、'「空間」と「持続」ーアンリ・ベルクソンにおける空間と主体について、' 空間・社会・地理思想、5号、2～9頁、2000
- 5 大谷孝行、'森田正馬とアンリ・ベルクソン、' 人文社会学部紀要、Vol. 1, 2001.3
- 6 南出みゆき、'アンリ・ベルクソンの思想にみる芸術の機能ー「笑い」を中心にー' 美術科学研究(23), 145-152, 2005
- 7 加藤憲治、'ベルクソンの直観論ー「バクゼンとした直観」から「判明な直観」へー、' 待兼山論叢、第23号、大阪大学文学部、1989
- 8 作田啓一、'ベルクソン社会哲学、' 社会評論、第38巻、日本社会学会、有斐閣、1987
- 9 中島盛夫、'ベルクソンとの関連、' 実存主義、39号、理想社、1967.3
- 10 鈴木由加里、'アンリ・ベルクソンと井上円了、心霊主義をめづって、' 井上円了センター年報、19号、57～79頁、東洋大学、2016
- 11 瀧一郎、'想像と類比ーベルクソンの直観の論理、' 美学、第56巻4号(224号)、2006
- 12 同上、'ベルクソンに於ける「直観」の概念ーベルクソン美学研究ー、' 美学、第39巻3号、13～24頁、美学会、1988
- 13 亀喜信、'ベルクソンにおける直観と知性との諸相、' 倫理学年報、41集、日本倫理学会、1992
- 14 岡部平太、'スポーツと禅の話、' 293～306頁、不昧堂、昭和42年
- 15 菅野盾樹、'ベルクソンの「直観」、' 年報人間科学、3、166～174頁、大阪大学出版、1982
- 16 山田秀敏、'ベルクソンにおける直観とイマージュ、' 中京大学教養論叢、第35巻4号、中京大学出版部、1995
- 17 川端繁之、'記憶力と直観ーベルクソン哲学における隠された「論理」についてー、' 哲学、41号、北海道大学哲学会、2005.7
- 18 中村雅之、'ベルクソンの直観と概念の再編成、' 大阪大学人間科学部紀要、16、201～219頁、大阪大学出版、1990
- 19 浅野安太郎、'ベルクソン、' 勁草書房、1982
- 20 鈴木力衛他訳、ベルクソン全集、第三巻、白水社、1976
- 21 松浪信三郎他訳、ベルクソン全集、第四巻、白水社、1976
- 22 平井啓之訳、ベルクソン・時間と自由、白水社、1990
- 23 石井敏夫、'ベルクソンの記憶力理論ー「物質と記憶」における精神と物質の存在証明ー、' 理想社、2001
- 24 田島節夫訳、アンリ・ベルクソン・物質と記憶、白水社、1999
- 25 鈴木大拙著、北側桃雄訳、禅と日本文化、講談社、2005
- 26 玄侑宗久、現代語訳般若心経、ちくま書房、2006

Bergson and Zen  
—On their Intuition—

IWAMOTO Hajime

**Abstract**

This article reviews a study of Intuition of Zen and Bergson. The world of Intuition ignores logic in both Bergson and Zen, so if they don't depend on metaphor, they can't find an appropriate way of expression. But this is surely intuition. So first, we examine what the Intuition of Bergson is. Then we consult the books of Bergson: 'DI'(1889), 'MM'(1896), 'R'(1900), 'EC'(1907), 'MR'(1932), 'PM'(1934), 'Mél'(1972) and we search for his notion of Intuition. Next, we use 「古則」 of 「趙州狗子仏性」 in the first rule out of the fourth –eight rule in 「無門関」 that handles 'Thought of Nothing' in order to study the notion of Intuition in Zen, because 'the world of nothing' is another way to say the world of intuition. Furthermore, we compare the Intuition of Bergson and Zen and bring each similarity into relief. Finally, we relate the reorganization of ordinary concepts in Bergson to the criticism of Bergsonian intuition concepts. But in the fourth chapter, we only examine from the view point of the notion of utility which requests intuitive recognition, we don't yet discuss about another point of view, namely, 'sympathy'. So we will consider this point next time.

**Keyword:** Intuition, Bergson, Sympathy, Thought of Nothing, the notion of Utility